

和泉聡足利市長に聞く(第1回)

—新聞記者として考えたこと—

開倫塾

塾長 林 明夫

林 : おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。今回の「開倫塾の時間」では、足利市長の和泉聡様をお訪ねして、いろいろなお話をお伺いしたいと思います。今朝は足利市役所の市長室をお借りして、この番組を放送させていただきます。市長、よろしく願いいたします。

和泉市長 : こちらこそ、よろしく願いいたします。

林 : お聞きしたいことはたくさんあります。11月は「NIE(新聞を教育へ)」月間です。和泉市長は、市長になられる前は朝日新聞の宇都宮総局長をお務めになられていたということですので、まずは新聞に関するお話をお伺いしたいのですが、よろしいでしょうか。市長は、なぜ新聞記者になられたのですか。

和泉市長 : 一番最初に新聞記者を意識したのは、小学生の頃です。余談めいてしまいましたが、「ローマの休日」という映画が大好きで、「グレゴリー・ペックの新聞記者が格好いいな」と思ったのが、新聞記者を意識した最初ではないかと思います。そして、大学を終えて仕事を選ぶときに、例えば新聞に一枚の写真が載る、その写真にはどこかの国のリーダー同士が何かを合意してにこやかに握手をしている姿が写っている。写真はこの一枚ですが、実はその合意を形成する過程にはリーダー二人を支えるたくさんの人たち・スタッフがいる、その人たちそれぞれには人生があり、家族がいるというように、一枚の写真の奥には広がりがある。その広がりの方を垣間見ることができるのが新聞記者ではないかと思いました。その一枚の写真の奥に隠れているであろう人間のドラマの積み重ねみたいなものに少しでも触れることができれば、それを仕事にできるのであればきっといいだろうなと思って、新聞記者を目指しました。新聞記者を25年間続けたのですが、今振り返ると、なる前に思っていたことが7、8割は当たっていたかなという気持ちです。

林 : それはすばらしいお話ですね。大変勉強になりました。実際に朝日新聞社にお勤めになり、いろいろなところにご赴任されたと思います。例えばどんなところが印象的だったでしょうか。

和泉市長 : 国内は振り出しが仙台で、記者をしました。次は千葉で記者をし、そのあとに東京本社の社会部というところで事件記者をやりました。途中、会社の費用でアメリカのハーバード大学のケネディ・スクールに留学させてもらい、その縁で特派員の仕事がまわってきました。ブラジルの南米特派員を、サンパウロで3年半やりました。それは南米大陸を一人で担当す

る仕事で、会社と住まいはサンパウロにありましたが、平均すると月のうちだいたい半分ぐらいは小さいスーツケースを持って周辺国のアルゼンチン、ペルー、エクアドルなどいろいろな国を移動し、日本の朝日新聞の外国面にニュースを送っていました。このように、日本から一番遠いブラジルで勤務しました。正確には数えていませんが、出張ではヨーロッパ・アジアの25カ国ぐらいには行った経験があります。半分は事件記者、半分は特派員でした。

林：お一人で南米をカバーなさったのですね。大変なお仕事ですね。

和泉市長：南米に駐在している朝日新聞の特派員は一人だけですので、全部の国の政治も経済も重要事件も社会事象も全部担当しました。そういう意味では醍醐味があってとても楽しかったです。

林：素晴らしいですね。ところで、難しい話かもしれませんが、新聞にはたくさんの社会的役割があると思います。新聞の社会的使命、ミッションとはどんなものだとお考えですか。

和泉市長：社会的使命という意味ではいくつもあると思います。私は新聞記者時代に、「出前授業」という形で学校や開倫塾さんに出掛け、中学生・高校生に新聞記者の仕事をわかりやすく説明する活動をしてきました。私は事件記者が長かったのですが、新聞記者は例えば交通事故である方が亡くなったときには家族の方をインタビューして、その悲しみを伝えるという作業をします。なぜ新聞記者は、家族を失って悲しんでいる家族にインタビューに行かなければならないのかと自問自答しますが、やはり突き詰めて言うと、そういう方々の悲しみなりや思いなりが新聞に刻まれることによって、多くの人とその悲しみを共有すれば再発防止につながるということだと思っております。落ち込んでいる家族の方にインタビューを断られることはしょっちゅうですが、それでもぜひお気持ちを聞かせてほしいと、つらくてもインタビューに行くのは、やはり再発防止、同じような悲劇が二度と起こらないようにするためであると思っています。私を感じてきた新聞の一番の使命というのは、そこにあると思います。

林：素晴らしいお考えです。これから子供たちを含め、社会人も新聞を読ませてもらいたいと思います。では、どのように新聞を活用していったらよいか、新聞の活用方法についてご意見をお聞かせください。

和泉市長：テレビも何もかも消して、静かなところで、一日に1つでも2つでもよいから記事をじっくりと読む、そういう読み方をさせていただいたほうが新聞のおもしろさがわかり、新聞の価値を感じていただけるかなと思っています。ぜひこの読み方をお勧めしたいと思います。

林：記者さんも命懸けで新聞記事を書かれているわけですからね。

和泉市長：そこらいろいろなことを感じ取っていただけるのではないかと思います。

林：どうもありがとうございました。今朝の「開倫塾の時間」は、足利市役所の市長室におじゃまして、足利市長の和泉聡様のお話をお伺いさせていただきました。

和泉市長、ありがとうございました。

和泉市長：こちらこそありがとうございました。